書評・紹介

富貴原章信著

「日本中世唯識佛教史」

山崎慶輝

一

唯識学の概論書は多いが、日本唯識の学匠およびその教学の特徴等について纏めた書物は皆無に近い。ただ僅かに富貴原章信博士の『日本唯識思想史』（昭和十九年刊・四八〇頁・大雅堂）一冊があるのみである。しかしこれとても、その内容は佛教伝来から平安中期までで終っている。そこで日本唯識に関心をもつ者は、富貴原博士がその続編を出されることを鶴首して期待していたわけである。大谷大学の『学報』『研究年報』『佛教学セミナー』或いは『日本佛教学会年報』等に、博士が平安末期以後の唯識学匠について部分的に発表される度に、一日も早くそれらを一冊の書物に纏めて続編を出版していただきたいものと望んでいた。そして先の『日本唯識思想史』から三十一年経過して、今回『日本中世唯識佛教史』（四二九頁）が大東出版社から出版されたことは、学会にとって、殊に日本佛教や唯識を研究する者にとって、誠に貴重な贈物である。

二

本書は四章からなり、第一章は「第一回の復興」と題している。この題のつけかた自体が、先の『日本唯識思想史』を前篇とし、今回の『日本中世唯識佛教史』をその続篇と見ていることを物語っている。すなわち前篇は六章からなり、その最後の第六章は「衰微時代の法相宗」で終っていてこれが「第一回の衰微」に相当するので、今回は「第一回の復興」から始まるわけである。そして、第二章は「第二回の衰微」、第三章は「第二回の復興」、第四章は「第三回の衰微」と題しており、一見珍奇な題のつけかたであるが、そこに千年以上続いた法相宗の伝統とその間の盛衰をまざまざと感じさせる。

第一章「第一回の復興」（一～一六三頁）は、康和四年（1102）大乗院の隆禅が没してから、良遍が没した建長四年（1252）に至るおよそ百五十年間をいい、本章の中を㈠一般史の概要、㈡興福寺の系統、㈢東大寺の系統、㈣総結、に分けている。（この区分法は各時代の特徴によって多少の違いはあるが、各章ともほぼ共通している）。著者が各章のはじめに「一般史の概要」について述べていることは、前篇の『日本唯識思想史』以来一貫した方針で、これは佛教の盛衰が一般史の事項と密接な関係にあるという考えからであるが、同時にまた狭い佛教史の分野に局らず、広い視野に立って法相宗の盛衰を眺めようとする意図が窺われる。

次に㈡「興福寺の系統」の中を、(a)一乗院の門流、(b)大乗院の門流、(c)その他の系統、に分けて、それぞれの系統に属する学匠について、その伝記・著述・学説等について能う限りの資料を精査して詳細に論述している。平安末期の興福寺においては、一乗院・大乗院・喜多院などの諸流があったが、当時の興福寺勢力の中心は一乗院にあったので、まず一乗院系統の学匠十三名について論じ、次いで大乗院の五名について述べている。然し唯識教学の中心は喜多院の系統にあったとして、(c)その他の系統の中に八名を挙げているが、特に蔵俊・覚憲・貞慶・良算・良遍については、その伝記はもとより逸話の類まで拾いあげ、その著作およびその中に説かれる顕著な学説について詳細に論じている。蔵俊については二十頁、貞慶には四十六頁、良算には二十頁、良遍には二十五頁を費し、これらの一つ一つが纒った一篇の論文として読みごたえのある研究報告で、史学的な面のみでなく、唯識教学に精通した者でなければなしえないすぐれた業績で、著者の独壇場といえよう。

次の「東大寺の系統」に出てくる五名の学匠は、諸宗兼学者で倶舎あるいは唯識に通じた学匠を挙げたのであるが、勿論傍系で余り重要ではない。

終りの「総結」においては、第一回の復興期の特質として教学の刷新を挙げ、上述の蔵俊乃至良遍の教学復興を高く評価し、蔵俊の『唯識本文抄』四十五巻、貞慶の『唯識尋思抄』三十巻、貞慶の指導をうけて良算等が編集した『唯識同学抄』六十八巻をこの復興時代を記念する代表的著作とし、『本文抄』を基盤として『尋思抄』が作られ、『尋思抄』が発展して『同学抄』が成立したという。特に一二五四の論義を集大成した『同学抄』は唯識論の文の注釈ではなく、本論の問題となるところについて古来の論争を集め、それに取捨選択を加え、そのうち最も勝れたものを採用し、唯識論の順序にしたがってこれを結集したもので、これこそ唯識の日本伝来より六百余年間の研究成果を総合編集した不滅の金字塔というべく、しかも後世の唯識論解釈の基準となった。このような試みは前の時代にはなく、この点に画期的な意義があると讃えている。なおこの時期の特質として、唯識論の漢文を正しく読むために、不完全であった明詮の『導注』の訓点を完成させたこと、また唯識学の入門書として『百法問答抄』『初心略要』『注唯識三十頌』『覚夢抄』『二巻抄』が現われ、特に良遍の『二巻抄』は和文体で、これらは唯識佛教の日本化として意義あること、また因明についても蔵俊に『因明大疏抄』四十一巻、貞慶に『明要抄』五巻・『明本抄』十五巻、良遍に『因明大疏抄』八巻等大部の著述があってその研究が盛んであったこと、その他法華経の研究として蔵俊の『法華玄賛文集』九十巻、貞慶の『法華開示抄』二十八巻等があり、また南都佛教の一般的傾向として真言宗を兼学したこと、また念佛宗との関係、禅宗との関係にも触れ、更に戒律復興として実範・貞慶・良遍等の南京律を論じ、当時の太子信仰として貞慶とその弟子達の行迹をあげ、終りに全体に通ずることとして当時の教学復興に力を与えた春日板の印行を論じ、更に教学復興の根源に堅固な道心をもった学匠達が多かったこと

を挙げている。

第二章「第二回の衰微」（一六四～二五八頁）は、良遍が没した建長四年（1252）から南北朝の終り（1391）に至る百四十年間をいい、本章の中を㈠一般史の大要、㈡興福寺の系統、㈢総結、に分けている。特に㈡「興福寺の系統」の中では、(a)一乗院の門流に七名の学匠をあげ、(b)大乗院の門流でも七名を論じ、(c)その他の諸院では、当時の興福寺に百余の院坊があった中から東院乃至来迎院の計三十院をあげ、各院に属する学匠を院の系列別に計一〇八名をあげてその伝記等を論述している。さらに本章から、興福寺の系統の中に(d)「住侶の院坊」と題して十七名の学匠をあげている。これは当時の興福寺には学侶と衆徒の区別があり、学侶は公家の子弟で僧綱に任ぜられる資格をもつ寺内の支配層であるが、衆徒は妻子をたくわえ有事の際には僧兵となり、平常の法会神事には僧の装束をつけ戒蠲の次第によって着座したようである、この衆徒の中から学才があり道心がある者が頭角をあらわして学侶と同じ道を歩むものも出てきたので、特にこれらを「住侶の院坊」に属するものとして取り上げたのである。即ち平安時代には公家出身でなければ、探題になったり三会の講師を勤めることは殆んど不可能に近いことであったが、鎌倉中期以降は、公家出身者でない者でそれらの要職をつとめ、一宗の教学に重要な役割を果している。この傾向は時代が降るに従っていよいよ強くなり、南北朝時代になると、両門跡の学問指導までが、庶民出の学僧によってなされたという。以上のように、この時期の特徴は、教学の中心が公家から庶民に移ったことであるが、衰えたとはいえ、乱世のなかに唯識教学が亡びずに伝承されていったのは、やはり道心のあるそれらの学匠によってであり、彼等は訓論談義と講会の論義を研究することによってそれを伝えていったのである。

第三章「第二回の復興」（二五九～三五八頁）は、南北朝の統一（1392）から、営尊が他界した延徳二年（1490）に至るまでのおよそ百年間をいい、本章の中を㈠一般史の大略、㈡興福寺の系統、㈢その他の諸大寺の唯識宗、㈣教義解釈、㈤総結、に分けている。

㈡「興福寺の系統」の中は前章と同じ分類で、(a)一乗院の門流に五名の学匠をあげ、(b)大乗院の門流にも五名をあげ、(c)その他の諸院では、東院乃至発志院の計十九院に所属する学匠四七名をあげ、(d)住侶の院坊では、庶民出身の学侶として二四名をあげ、以上興福寺だけで総計八一名の学匠についてその伝記業績等について論述している。

㈢「その他の諸大寺の唯識宗」の中は、(a)東大寺、(b)薬師寺に分け、計四名の学匠について述べているが、特に文明の頃薬師寺の長乗は第一級の学者で、その伝統が長基・胤継に承けつがれ、徳川時代に高範・基範・基弁を輩出するに至るのである。

㈣「教義解釈」の中は、(a)訓論と講会、(b)訓論談義に分

けて論じている。訓論とは唯識論を訓読し、討論談義して本論全体の綱要を会得するのであるが、これは鎌倉時代から行なわれていたようである。この訓論談義の速記録が『訓論聞書』であり、当時幾種類もあったであろうが、纏って現在まで残っているのは光胤のものだけである。このような形式で唯識論の綱要を解説した書は前代にはなく、その意味では画期的な書である。著者は光胤について十四頁を費し、また別に光胤の『訓論聞書』について十頁をさき、計二十四頁を費して論じ、本書をこの時期の教学復興の記念すべき著作と讃えている。なお本書の特性として、鎌倉中期すなわち同学抄成立より光胤の時代に至るまでの高名な学匠は必らず何処かにその名があり、その点でも重要な意味があるという。

訓論によって全体的な綱要を会得するのに対して、講会の論義は本論の個々の問題についての本格的な研究である。著者は『大乗院雑事記』によって応仁元年（1467）頃興福寺において行われた重要な講会として、御斎会乃至淄州会の十四講会をあげてその開かれる月日を示し、また同書によって長享二年（1488）頃の興福寺の十二大会とその月日を紹介しているが、これらによると殆んど毎月何かの講会が開かれ、その講会において探題・竪義・講師・精義等が選ばれて論義が行われたことになるのである。なお中道という論題を取りあげて『訓論聞書』と『泉抄』とを比較し、また論草の一例として弁範の『唯識五重問答』の内容を紹介している。

著者は第二期の復興のなかを三期に分けて、その初期は憲胤・光暁・尭尋・専慶が活躍した応永年間とし、この時期は三大会も年々定期的に行われ、財政も安泰し、寺門の復興と学事振興に全力が注がれた。その中期は貞兼・訓営・永秀・光胤・光盛のときで永享より応仁に至る三十余年間を指し、この間に永享の乱・嘉吉の乱・応仁の乱があって、三大会もできぬ年が半分以上あったが、教学は振興した。道心ある学徒が多ければ佛教は隆昌するというよい実例であるという。その後期は興基・長乗・興憲・営尊が輩出した応仁より文明をへて延徳に至る三十年間で、戦国大名が独立し、荘園制は崩れ、寺門はいよいよ窮乏状態となり、この間に三大会が行われたのは僅かに五回にすぎないが、学問は盛んでその伝統は維持せられた。この時期より少し降って『泉抄』が作られたが、本抄は足利時代における唯識復興を後世に伝えるために、この初期・中期・後期の学匠の注釈を纏めたものと見られる、という。またこれらの学匠が公家出身でなかったことも前代と同じで、彼等は述記・三箇琉・同学抄その他幾多の註疏や論草を研究したばかりでなく、いまだ研究されていなかった問題について、それを新しく研究し、別の解釈まで発表したその論争が現在もなお多く残っているという。

第四章「第三回の衰微」（三五九～四二九頁）は、延徳三年（1491）から永禄七年（1564）に至る七十四年間をいい、本章の中を㈠一般史の大要、㈡興福寺の系統、㈢総結、に分けている。そして㈡興福寺の系統の中も前章と同じ分類で、(a)一乗

院の門流に三名の学匠をあげ、(b)大乗院の門流にも三名をあげ、(c)その他の諸院では、東院乃至発志院の十九院に所属する学匠二九名をあげ、(d)住侶の院坊では、上記の諸院のほかに英俊の『多聞院日記』に見られる阿弥陀院乃至蓮蔵院の四十二院をあげ、それらに属する学侶計九一名をあげ、また諸所の講問に、問者あるいは講師として二十回以上その名が見られる学匠十四名をあげている。さらにまた同『日記』に出てくる諸種の講問において行われた論義の題名三二二を整理し、その回数と同学抄の巻数とを示し、特に回数の多い重要論題について古徳の論草があったことを絡介し、大谷大学図書館所蔵の南都論草をも紹介している。終りに、当時最も多く行われた論義として約入佛法、乃至、三性真如離繋の七論題を取りあげて、そこで何が問題とされたかを同学抄によって解説している。

三

以上本書の内容を紹介したが、終りに本書撰述の意義について触れたい。初めにも述べたが、日本唯識に限定するとその専門書は僅少である。そのなかで著者が『日本唯識思想史』に続けて『日本中世唯識佛教史』を出されたことによって、法相宗の伝統の大略を窺うことができるようになった。これは学界への大きな貢献である。殊に中世の唯識学者についてこれほど詳細に調べたものは他に例がない。著者の三十余年にわたる努力の結晶であり、後学を稗益することは疑いない。

然し日本唯識思想史を完成させるためには、是非とも第三巻として近世の唯識学者について纒める必要がある。江戸中期以降続々と佛典が出版され、その活況と呼応して各宗の学問も興隆し、唯識の研究においても興福寺に盛源・清慶、法隆寺に懐賢、薬師寺に高範・基範・基弁、豊山学派に法住・快道・戒定・仁慶・信慶、その他の諸宗に秀翁・海応・覚洲・聞証・普寂・恢麟・旭雅・宝雲・百叡・憲栄等が輩出した。日本大蔵経の解題を富貴原博士と共に担当して、たまたま私が基弁の『法相玄論』や『五種姓玄論』を担当し、基弁が日本唯識にとって洩らすことのできない重要な人物であることを再確認したので、ひとしおこの感が深い。博士もその積りでおられたことは本書の最後が、英俊の幽讃談義にふれて「さらにこれが発展すれば、後に基弁の法相玄論の中に説かれることになるであろう」という文で終っていることによっても窺われる。ところが本年五月に博士が急逝されたので、第三巻は遺稿がない限り出版できないことになった。学界にとっても痛恨のきわみである。

最後に、本書に索引があればと痛感するのは私一人ではあるまい。本書のみでも二七七名以上の学匠名が出てくる。論題も多く、学説もかなりある。恐らく著者は、第三巻を出すときに総索引を添える予定であったろうと思うが、それが不可能になった現在では、他日再版される機会があれば、一・二巻を纒めた索引を添えていただければ斯学の研究者にとって幸いである。

(昭和五十年二月、大東出版社、A五版、六、五〇〇円)